

「こころのうつわ」

～ 忘れられた作文 ～

この数年、日本では毎年のように、大地震や集中豪雨で多くの人がお亡くなりになったり、被災して家を失ったりしています。

そして、7年前の東日本大震災で被災した当時の中学生も、今や成人式を迎え、皆それぞれの生き方で、地域社会とつながっています。

今日は、「小さな会話」という題の、岩手県の14才の女子中学生の作文を紹介します。作者は不明です。

私は、この間、祖母の家へ行きました。祖母の家は、私の家のすぐ近くです。小さいころよく、母の使いで祖母の家に行ったものでした。

祖母は、「えらいね。たかこ、これでおやつでも買っといで」と、やさしく私の手を取りながら言い、私は「ありがとう」と、それだけを言い自分の家まで走ったものでした。

それなのにいまでは、母に使いを頼まれても、いまいち行く気になれず、心のなかではめんどくさいなあと思う気持ちになってしまうのです。

その理由は、何年か前から、祖母が寝たきり老人とよばれる人になったことだろうと思います。祖母の家に行っても、つまらないという、ぜいたくな気持ちをもってしまい、幼いころの、あの素直な心を失いかけているのに気がつくのです。

ところが、この間、姉と母が祖母の家にごはんを食べに行くというので、私もけっこう浮き浮きしながら、しばらく見ていなかった祖母の家の土間を目に浮かべていました。心の底から、なつかしさが体全体にしみ渡りました。私が土間に立って最初に目に写ったものは、乳母車でした。

そして私は、幼い自分を乗せた乳母車を押す祖母の写真を思い出しました。すると、今度は、祖母に会いたくなりました。そんなことを頭に描いた私に、姉が、「おばあちゃん、どうしてるかな。おばあちゃんの部屋に行ってみようか。」と言うので、私は、姉の後を追って、祖母の部屋に入りました。

現実どおり、祖母は、老人用ベッドに横になっていました。でも、私たちの顔を見て、うれしそうに笑ってくれました。祖母は、待っていたかのように、すぐにしゃべり出しました。

でも、私には、言葉が聞き取れません。祖母の言葉が、私の言葉とちがっていたからでした。

しかし、祖母が口を開けて一生懸命しゃべっている姿を見て感動し、言葉がわからなくても、一当懸命、目を見て聴こうとしました。

そうしていると、祖母が人差し指で壁を指すので、見上げるとそこには、黄ばんだ色一枚の似顔絵が張ってありました。

その紙には、「おばあちゃんの顔」と書いてありました。隣にいたおばさんが「あの、おばあちゃんの顔って字を書いたのは貴方よ。」「そして絵は、お姉ちゃんが描きたいのよ。」と教えてくれました。同時に、わたしの頭は過去の記憶を思い出そうと必死でした。

祖母との久々の出会いで、私には楽しい思い出も出来ましたが、改めてコミュニケーションの大切さを学んだ気がしました。

たしかに私の祖母は、言葉がはっきり出てこないけれど、声が出ていれば話しているんだし、相手が、聞こうとしていれば、それは、りっぱな会話というものだろうと、私は祖母に会って、新しい考え方を教えられたような気がしました。

さて、最後にひとつ、この作文と校長先生との出会いについて補足します。

今から6年前になります。震災の後、岩手県の知り合いの消息がとても気になっていた私は、夏休みの期間を使って現地に行きました。

津波の爪痕が生々しかった町中で、たまたま入った廃墟同然の公民館で、今、皆さんに紹介した作文用紙と出会いました。

現地で作文を読んだ後、私は、汚れた作文用紙を自分のカメラで記録として残しました。あれからずっと、この作文を書いた中学生の生きた証を、次の世代の人たちに伝えていくのも大切な事と考えていました。今、やっと、作者の思いを伝えられたような気がしました。終業式のお話しは以上です。

ここからは、校長先生から皆さんへのメッセージです。皆さんには、この夏、ぜひ、他者への思いをしっかりと受けとめるための「心の器」や、社会の出来事をしっかりと見つめる目を養って欲しいと思います。

いつもの夏休みより、一つ上の楽しく充実した夏休みになることを願っています。以上です。